

〈高校現場と英語辞書②〉

自己表現に役立つ辞書を求めて

持齋雅佳



■はじめに～本校辞書指導時の苦闘

昨年度まで本校では紙の辞書『ジーニアス英和辞典』を必須指定し、1年生4月は中学校の復習と辞書指導を行ってきた。真新しい黒光りする箱から取り出した『ジーニアス英和』と「活用問題集」を使用した辞書指導は、授業開始約15分後に最初のつまづきが生じる。問題集5ページB. 1. “elegantly は _____ を引けば出ている” に生徒が声を上げる。「先生、載ってない!」「この問題、訳わかんネエ」——「その“～・ly”の“～”はその前に出ているスペリングと同じ、っていう意味の記号なんだ。“～・ly”の“～”はこの場合、“elegant”のこと。だから問題の答えは、“elegantly は elegant を引けば出ている”ということなんだな」。大多数の生徒が半信半疑の「ヘー」という反応を見せる中、目ざとい生徒の声が上がると。「先生、“el-e-gant”ってあるけどこの短い棒線は何?」——（来たっ!）「それはね、音節と言って……」。次々と発生する生徒との応答の末、「活用問題集」は半分ほどしか進まず、5月からは教科書授業に入っていくのであった。

■電子辞書と紙の辞書の位置付けは同じ?

今年度から本校では辞書指導の時間がなくなった。従来「紙の辞書」にこだわってきた私たちが、『ジーニアス』が入っていれば電子辞書の使用を認める方向に路線変更し、残念ながら現行の「活用問題集」は電子辞書の使用を前提として作られていないためである。ある書店の話では、8割近い本校新入生が電子辞書の方を選んだとのこ

とである。不十分ながら辞書指導を受けてきた上級生と、辞書の使い方を学んでいない1年生との間に今後どのような違いが見られるかについては、追跡が必要であろう。

私のように紙の辞書に慣れ親しんできた世代にとって、電子辞書のデメリットを列挙することは容易い。画面の狭さ、スクロールの面倒な点はその大きなものであろう。しかし“視野が狭い”生徒にとっては、電子辞書の小さな画面はむしろ魅力的なはずだ。今そこにある画面だけを見ていればいいのだ。たとえば先の elegant では、語義を尋ねれば、「選び出された」と答える生徒が圧倒的多数である。理由は簡単、見出しのスペリングの次に最初にある日本語だからだ。「それはこの言葉ができたときの基本的な意味だから、必ずしも今使われている意味ではない」と何度説明したことか。生徒が一度に読むのは2・3行程度なのではないだろうか。紙の辞書なら眼ですぐに続く行を見ればいいが、電子辞書ではスクロールして次の画面を見なければならぬ。生徒が英和辞典を使う最大の用途は「語義を調べる」であるから、電子辞書ではスペリングの次にまずコア的な基本的な意味を掲載してはどうか。その意味を使った用例や語法の検索に次の配慮を払い、発音や語源的意味、語形変化や派生語は後回しでもいいのではないかと思う。電子辞書のメリットと現代若者気質を考えれば、紙の辞書と電子辞書はダブルスタンダードであってもいいと思う。（私自身は、まず紙の辞書を使ってから電子辞書に入りたい、と願っている）

■自己表現としてのライティングと辞書

書くことによるコミュニケーションのためには和英辞典は必須である。ハイブリッド方式の『ジーニアス英和』が第2版となり、コア語表示を採用し、ライティングの指導に果たすその役割は大きいと期待できると思う。従来の和英辞書の2大難点、「結局英和辞書で引き直さなければならない」「ピッタリ合う英語表現がわかりにくい」がどちらも解決の方向に向かっているからである。

本校入学当初の生徒に自己紹介の英文を書かせると“I childhood from cooking like.”というタイプの文にしばしば出会う。“私は子供の頃から料理が好きです”という日本語の語順に従って単語を並べたものである。このような生徒たちの中の純粹・素直な側面を見出し、手間をかければ、生徒たちはそれに応じて成長を見せてくれる。

私の自宅には200枚近い色紙とさらに大量のレポートがある。平成7年度から5年間担当した3年生「英語II C」「ライティング」での生徒作品である。私は授業を通じ「コミュニケーションとしての書くことによる自己表現活動」を心がけてきた。色紙は、年度末課題「高校生活3年間またはこれからの自分の人生を象徴する英語を、自分なりのデザインで書く」による作品である。

たとえば7年度卒生徒で“pluck”という語を選んだ男子がいた。『『困難・危険に立ち向かう勇気』という意味の語の中に“luck（幸運）”の綴りが含まれているので選びました』という生徒のコメントが付いている。語源的意味“髪を抜き取る”だけでなく、見出し語の語義の最終個所まできちんと読み取ってくれていたのである。

夏休みをもフル活用し、2学期の2カ月にわたって「志望理由書」に取り組んだ。インターネットや学校見学・会社説明会等で、自分の足と眼で情報を入手し、自分の言葉で表現することで相手（学校や企業）を説得するよう求めた。そのためには論拠とともに内容構成も同様に大切であることを訴えた。生徒にとっては採用試験や推薦入試

の時期でもあり、いい準備になったと思う。

学年末には毎年「死刑制度の是非」に取り組んだ。共通の課題英文（死刑廃止論の立場）を踏まえて自分の立場を3点以上の論拠を立てて5段落以上の構成で論述する。事前に「死刑制度の是非」を問うと、毎年8対2で死刑制度賛成派が圧倒的多数である。しかし課題文を読み、各自が図書館やインターネットで検索した後は、少なくとも7対3で死刑廃止論が多数派になる。5年連続のこの逆転は偶然なのだろうか？ 受験テクニックから考えれば課題文を否定する立場の方が論述を展開しやすいはずなのだが……

■もっと未来志向を育てたい

私的に最も印象深い年度末課題作品は10年度生徒の“You can”である。彼女は自分に自信が持てず、第1希望を自らあきらめてしまい、次の目標も一時くじけそうだったが周囲の支えと本人の取り組みで踏ん張り、実現できた。彼女が自分だけの“I can”（私はできる）ではなく、“You can”（あなた、あなたたちもできるよ）と表現したところに彼女の自信獲得と成長を見る思いがする。単純・素朴な中にも自分の思いを込めた自己表現ができるような生徒、そしてそれを受け止められる生徒をこれからも育てていきたい。

ただ、気になることがある。過去・未来のどちらを選ぶかは本人の自由だったが、7年度は3対2で未来が多数派なのに対し、11年度には3対2で過去を選ぶ生徒が多数派だった。時代の閉塞感のためかもしれないが、生徒たちの前途を思うと気がかりである。未来に希望を持ってほしい。過去は“何も思いつかない”未来の裏返しではなく、未来に向かっていくベースであってほしい。

今年度、5年ぶりにライティングの授業を担当することになった。生徒たちの世界が広がり、自分の将来に展望が開けるよう、『ジーニアス英和』『同和英』とともに楽しく苦闘している。

（じさい まさよし・太田市立商業高等学校教諭）